

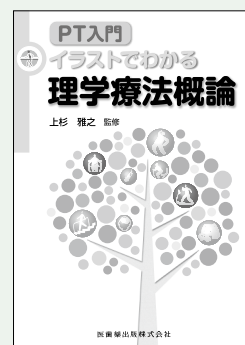
書評

PT入門 イラストでわかる理学療法概論

上杉雅之(監修)

B5判・308頁

定価：本体4,200円＋税
医歯薬出版刊、2020年



[評者] 大橋ゆかり 茨城県立医療大学

本書は「イラストでわかる」シリーズの1冊である。イラストが多量に用いられ、近年の理学療法学教科書のトレンドにもなっているわかりやすさを追求した体裁となっている。説明文も親しみやすい文体で読みやすい。しかし、理解してほしい内容がやさしいわけではない。それは、理学療法士が専門職であり、理学療法学が専門的学問分野であることを考えれば当然のことである。

本書は、総論、評価・介入方法で分類した各論、介入対象で分類した各論と「臨床実習」という章から構成されている。総論の部分は、「理学療法とは」という概論のなかの概論といった章から始まる。この章では、古代から現代までの理学療法の歩みが丁寧に整理されて語られる。私が現役理学療法士として経験してきた時代の理念の変化も含めて、あらためて理学療法の歴史を振り返ることができ、理学療法士であることの誇りを感じさせられる内容になっている。

後半2つの各論では、代表的な

検査手技や代表的な疾患による障害を取り上げて、具体的な評価法、介入法が紹介される。本来、概論書は各論を扱うものではないが、理学療法の全体像を把握するためには、ある程度具体的なイメージをもつ必要がある。本書ではこの点にも充分な配慮がされており、総論部分で大枠を与えた後に、その枠のなかに各論としていくつかのイメージの島がつけられていく。各論で扱われるキーワードは網羅的だが、その解説は完成版ではない。これもまた、学生にその先の興味を誘うための仕掛けと言えるかもしれない。

教育法には演繹的方法と帰納的方法があるとされている。帰納的教育方法では、学生は自ら興味をもって学修し、新たな知識を発見していく。近年推奨されているアクティブ・ラーニングは帰納的学習方法の1つである。本書の各論で、すべての正解が与えられるわけではない部分をうまく利用すれば、学生に帰納的学習を促すこともできそうだ。一方、日本の伝統的な教育は専ら演繹的方

法によって行われてきた。演繹的方法では教師が正解を教え込む講義が行われる。本書には、理学療法初学者に必要な知識に関するキーワードが豊富に含まれているので、演繹的講義を行おうとする教師には非常に有用である。キーワードを取捨選択することでもできれば、あるキーワードをさらに掘り下げて講義することもできる。

さて、本書の第6章は「臨床実習」となっている。この章では、学生が臨床実習に臨む際の心構えが述べられている。このような内容は理学療法の概論書としては珍しいように思うが、理学療法学生としての資質について教えるという意味では面白い試みだと思う。

本書は教師への教授法のヒントを多く含んでいると同時に、本書からは、学生に理学療法の魅力を伝えたいという著者の気持ちを感ずることができる。新しい時代の理学療法概論書として推薦できる良書である。